
宿命の旅路

死神の羽織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宿命の旅路

【Nコード】

N4340N

【作者名】

死神の羽織

【あらすじ】

不良と嫌われ、恐れられた一人の高校生橘優人は、学校の桜並木でひとりの女子生徒春日井サクラと出会う。優人になにかと話しかけてくる優人は疎ましく思い、むしっていた。優人は家族も、友人も、恋人もそんなものは何もいらなかったと思っていた。

俺は何も求めない。大切なものを失う悲しみを誰よりも知っているから……

そんな優人との出会い。それは彼の宿命の旅路の始まりだったのだ。

桜の季節

ここは、都会とも田舎ともいえない普通の町にある高校だ。そこは、ごく普通の進学校だ。そこに通う高校3年生、橘優人。身長175センチ、体重68キロ、座れば地面につきそうなくらい長い金髪で、顔もなかなかの2枚目だ。しかし、

男子生徒A「納得いきません!!」

男子生徒B「なんで僕らがあいつと同じクラスなんですか!」

担任教師「そこまで嫌うことないだろう? あいつが荒れてたのは、中学の頃らしいし」

男子生徒A「しかし、先日も5人の他校の男子生徒を病院送りにしたとかいうじゃないですか!」

担任教師「ただのうわさ話だ。そんな噂で、クラスメイトを疑うものじゃない。話してみると、気が合うかもしれないぞ。」

男子生徒A「……………」

男子生徒B「……………」

完全に相手にされず、あきらめて職員室から出ていく二人。担任教師「しかし、あいつももう少しクラスになじめればいいのだが……3年間担任をうけてはいるが、全くそんな気配はないよな……」

嫌っているのは、生徒だけではない。この担任教師以外の度の教師もが彼とはかわらうとしなかったのだ。

一方の張本人、橘優人は少し遅めの登校だ。学校の前には100メートルくらいのゆるやかな坂に桜並木がひろがっている。

優人「桜か……………」

舞い落ちる桜の花びらをひろいあげて物思いにふけていた。そのとき、

女生徒「こんにちは。」

につこりと笑顔で挨拶をしてきた。

女生徒「きれいですよね。この桜並木。私の名前もサクラって言うんですよ。私のお父さんとお母さんも大好きな花だったので、そういう名前にしたそうですけど。」

初対面の男に何を言っているんだと、正直思った優人だったが、優人「そうか・・・まあ、その通りだとは思うよ。俺も・・・」

優人はすこし笑みを浮かべてつぶやいた。

サクラ「そうでしょ。やっぱり地球はいいですね。こんなきれいな風景があるのだから。」

優人「あつそ。そいつはよかったね。」

半分馬鹿にしたような口調で優人は答えた。

サクラ「あ、遅刻しちゃう。じゃあ・・・また、あとで。ばいばい。」

優人「・・・また、あとで？」

そして、朝のHR。今日は新学期初日。クラス分けを確認し、教室に行く。

優人「なるほど・・・そういうことかい・・・」

担任教師「えーさつそくだが、転校生を紹介する。」

担任の高橋によって、転校生の紹介が行われていた。

サクラ「えー今学期からこの高校に転校してきました、春日井サクラです。よろしく願います。」

とても、愛想よく挨拶をするサクラ。そして、高橋先生によって席を案内された。そこは偶然にも、優人の隣の席だった。ちなみに優人の席は、窓側の一番後ろの席である。

サクラ「お隣さんだね。橘優人君。」

優人「なんで同じクラスだと分かった？」

サクラ「ほへ？」

優人「さつき、またあとでねっていったろ？なぜ同じくクラスだと分かった？」

サクラ「それは、マホ・・・じゃなくて、なんとなくだよ。するどいんだね、橘君。」

優人「どうでもいいけど、あんまり俺とはかかわらないほうがいいぞ。」

サクラ「え？どうし・・・」

どうして？と言おうとして、クラスの女子に俺と話さないようにうながされた。それと同時に、優人は席を立つ。

女生徒A「春日井さん。あいつとは話さないほうがいいよ。」

女生徒B「そうよ。あいつ、ちょー悪い奴だし。」

男生生徒A「ああ、何人も病院送りにしたって話だぜ。無抵抗なおばあさんも半殺しにしたとか聞け。」

男生生徒B「ああ、かかわないほうがまだよ。」

先ほど職員室で担任にぎやーぎやーいった連中もいつてきた。

サクラ「そんな風には見えなかったけど・・・ただ・・・」

桜並木の中で、物思いにふけていた優人の姿を思い出してみると、

サクラ（あの人・・・すごい遠くを見てた。ものすごく悲しい目で・・・）

サクラの転校初日。人づきあいと愛想がいいサクラには、いつぱい友達ができた。サクラにとっては新しい学校生活のスタートには、最高のスタートではあったのだが、クラスから孤立していた、優人の事が気になった。日中に、サクラは何度か声をかけたがシカトされてしまった。やっぱり、授業中もどこか遠くの空をみつめていた。そして、下校時間。帰宅部のサクラはまっすぐ帰宅とはいかず、町を見物がてら、買い物していた。適当にぶらついて、帰ろうとした時サクラが見かけたのは、

不良A「ああ！！なめんなよ！！！！クソガキが！！！」

そういつて、不良4人組が小学校低学年くらいの男の子とその母親らしき人を取り囲んでいる光景だった。所謂、かつあげだった。その少年は母を必死にかばうとしてる。

不良B「おお、ガキのくせに俺たちには向かう気だぜ。こいつ。」

男の子「お母さんに手を出すな。」

不良C「うわ、こいつマザコンだぜ！チョーうけるんですけど（笑）」

そのとき、男の子は不良のすねをおもいつきり、蹴っ飛ばした。

不良C「うわ・・・いつつて。」

不良D「てめー調子のとてるんじゃないぞー！！！」

そうして、容赦なく男の子の腹を蹴っ飛ばした。うずくまる息子をとっさにかばおうとする母親。

そのとき、ひとりの男が不良Aを片手で持ち上げ、その顔面に思いつきりパンチをくらわした。不良Aは近場のゴミ捨て場の中に埋もれる。

不良C「てめー！！！！なにしやる。」

そういつて男になぐりかかった。しかし、男の拳のほうは圧倒的に速かった。見事なクロスカウンターが顔面に決まり、前歯が欠け、鼻から血が流れた。よろめいた瞬間、優人のハイキックがまたも顔面に炸裂し、不良Cはその場で気絶した。

そこにいたのは、学校では嫌われ者とされ、不良と噂されていた橘優人だった。

反逆国の皇女（前書き）

前作の続きです。不定期ですが、がんばって続けて生きたいなと思
っています。今月中には、目標として10話は投稿したいですね^^

反逆国の皇女

不良B「てめー!!!なにしゃがる!!!」

優人「ただのかつあげなら、正直興味なかったが・・・ただ、てめーらみたいなクズをぶちのめしたくなっただけだ。」

そういつて、指を鳴らす。

不良D「この野郎!!!!」

サクラ「危ない!!!」

サクラが叫んだのもそのはず。不良Dはナイフを取り出し、突進してきたのだ。しかし、そのナイフをあっさりとかわす、そのとき不良B「しねやー!!!!」

不良Bが鉄パイプで殴りかかってきた。そして、

不良B「そ・・・そんな馬鹿な・・・」

優人はそれを真剣白刃どりのごとく、それをうけとめた。その瞬間、優人の蹴りが不良Bのはらにはいった

不良B「・・・・・・・・・・う・・・・・・・・」

当然のように一瞬で黙らされる。

不良D「・・・・・・・・こいつ・・・・つえー・・・」

ナイフを持って、強気だった不良Dも弱腰になり、逃げようとするが、

優人「待て・・・・・・・・てめーには・・・・あのガキがてめーに受けた数倍の痛みを味あわせてやろう。」

不良D「ああ・・・・・・・・・・・・・・・・ぎゃー!!!
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

あまりにもグロテスクなシーンなので割愛させていただきます。

騒ぎが大きくなり、警官が駆け付けた。不良組4人組のうちの2人は救急車で搬送されていた。

不良どもはボロボロになりながらも、その場を後にする。優人も逃げようとする。去り際に、男の子に優人は

優人「小僧。強くなれよ。」

男の子はコクリとうなずいた。そうすると、その男の子の頭をポンポンと軽くたたき、その場を去って行った。それにしても、すごい逃げ足だ。あつという間に見えなくなった。慌てて、サクラも追いかける。

数キロ離れた公園のベンチで優人が腰かけていると、

「こらーその不良高校生！」

優人「はあ？」

振り返ると、そこにいたのは、

サクラ「へへへ。びっくりした？」

そういつて、手に持っていたジューズを一本手渡す。

優人「なんだよ、またあなたか・・・ま、喉かわいてたからよかったよ。財布家に忘れちゃった。」

そういつて、ジューズを受け取り飲み始めた。

サクラ「橘君はやっぱ、みんながいうような悪い人じゃなかったね。」

優人「あんたが何を聞いたり、何を見たのかは知らないけど、多分それはすべて事実だ。」

サクラ「事実かもしれないけど、真実ではないよね？」

優人「どういうことだ？」

サクラ「だって、何人も病院送りにした、でも、橘君は警察にハマってないということは、ああいう不良ややくざなんかを病院に送りしてきたからでしょ。まあ、警察につかまってないのはその逃げ足のおかげだろうけど。」

優人「さっきの見たたのか・・・じゃあ、老婆を半殺しにした話は？あれも事実だぞ。」

サクラ「その人、スリの常習犯でしょ？」

優人「……………」

サクラ「足が悪い振りして、助けを求めて、助けてくれた人からお金をスル。大方、それを優人君に見破られて、橘君の逆鱗に触れたってどこかしら？」

優人「ああ、あの婆。俺から4万もスリやがった。まあ、もちろん逃げられる前に気付いたけどな。てか、なぜそこまでわかる？お前は何者だ？」

サクラ「……………実は……………私……………地球人じゃないんだ。」

優人「は？今何って言った？」

サクラ「私はここの星の人間じゃないの。信じられないかもしれないけど。」

優人「まさか、どこかの星の王女様ですとかいうんじゃないんだろうな？」

サクラ「実はそうなの。」

その瞬間ジューズを吹き出しそうになり、なんとか耐える優人。しかし、自然とそれが嘘には聞こえなかった。

優人「だからか。登校前に俺が同じクラスだと分かったり、俺の記憶を読んだり、地球人にはなかなかできることじゃないな。」

サクラ「地球人にもテレパシーとか超能力とかあるけど、それと似たようなものかな。私たちの星では、これを魔法と呼んでるの。ちなみにこれは風の伝達魔法。私はすべての属性魔法を使えるけど、戦闘に向く魔法はほとんど使えないわ。」

優人「風、土、火、水みたいな感じが……………」

サクラ「あと、氷、雷、光、闇の魔法があるわ。特に、光と闇は強力な攻撃魔法を持ってるわ。」

優人「よく、ゲームとかでありがちな話だな。」

サクラ「でも、所詮魔法は戦いの道具。争いは絶えないわ。」

優人「お前の国でもそうなのか？」

サクラ「国単位で戦ってるわ。一番の大国がバルガ王国。私たちの

住む星は、サイコティス星って星で、地球の半分にも満たない小さな星。その星の大半をしめてるの。

優人「で、お前がその王女ってか・・・」

サクラ「違うわよ。」

優人「え？」

サクラ「王女じゃなくて皇女。私は、そんなバルガ王国から独立して第二の勢力として君臨している、ガイア帝国の第一王女よ。ちなみに、お父さんは、自信を始皇帝と名乗ってるから、歴史はかなり浅いわね。」

優人「ぶ・・・げげほ・・・って争いを起してる張本人じゃねーか！！！！！」

飲んでいたジュースを噴出して優人は叫んだ。

サクラ「まあ、その前から争いはあったからね。今は数が国の数がまとまってきたほう。今は20もないくらいかな。自治を宣言してる町とかもいたらもっと勢力はあるけど。」

優人「なんで、そんなに争いが多いんだ？」

サクラ「バルガ王国の王リチャードは残虐な暴君よ。無抵抗な集落を宣言なしで、攻め滅ぼしたわ。おまけに地方の自治は役人がやりたい放題で民が苦しめられてるの。そんな国によって自分の人生が左右されるなんて絶対に間違ってる。」

優人「王国によって苦しめられている民を救うべき、反逆ののろしをあげた・・・か。」

サクラ「うん。でも、やっぱり私たちがいけないのかな。」

そんな風に悲しそうにつぶやくサクラを優人はただ見ていた。

戦いの意味

優人「私たちがいけない？」

サクラ「うん。だって、私のお父さんがバルガ王国に対して反乱してガイア帝国つてのを作ってから、争いが激しくなったのは事実。多くの血が流れたわ。それってやっぱり、私たちのせいってことでしょ？」

優人「そうだろうな。」

サクラ「はつきりいうんだね・・・橘君。」

優人「ああ、だってそうだろ。それが間違ってるかどうかなんてお前らがきめる事じゃないだろ？」

サクラ「どういうこと？」

優人「あんたも地球や日本の歴史について勉強したなら知ってるだろうが、この星にもいつぱいの争いや戦争があった。」

サクラ「そうだね。日本で言う戦国時代かな。まさにそんな感じ・・・」

優人「だろ。しかし、それが正しかったのか、それとも間違っていたのか。どっちだと思う？」

サクラ「それは戦争はよくないよ。多くの血が流れて・・・でも、結果的には、誰かが勝つことによって、戦争はなくなったとは思っけど・・・あ・・・」

優人「戦争は確かにおろかな事だ。しかし、そういった厳しい時代に生きてきた人々の行動が未来の俺たちを導いてるんだ。つまり、お前の考えてる事は結果的なものでしかない。そんなもの、今を生きる俺たちに分かるわけないんだ。」

サクラ「うん。」

優人「でも、俺はお前の親父さんのやっていることは無駄ではないと思うぞ。少なくとも、誰かのためにはなっているからな。」

サクラ「そうかな。」

優人「お前はお前の信じる道を行けばいいんだよ。それでいいじゃないか。」

サクラ「そうだね。お父さんは、戦いの嫌いな私のために地球に行ってきたさいつて。いつてくれたの。お前が高校を卒業するころには、戦いのない星になつてゐるからつて。」

優人「へー。いい親父さんじゃん。でも、お前の国に敵対してゐる国の奴らがここに来ることはないのか？」

サクラ「そのための護衛はいるんだけど……」

優人「いるけど？」

サクラ「ちよつと前の戦いで怪我をして、あと2ヶ月は魔法を使えないんだよね……」

優人「おいおいおい……」

サクラ「まあ、一応地球の周りの衛星付近に防衛線があるから、それを突破しない限り、地球に敵が来る事はないけど。」

優人「突破される事は？」

サクラ「ほとんどないよ。まあ、今は休養も込みで一緒に滞在して普通に生活してゐるよ。」

そんなこんなで結構な時間、優人はサクラと話をしていた。ここまで、人と話したのは果たして何年ぶりのことなのだろうか。誰とも関わらないと5年前に誓つたのに。しかし、どこかなつかしい気持ちになつた優人であつた。

近くのスーパーで、夕食の材料を買い、帰路につく。学校から約2キロの道のりに橘優人の自宅があつた。誰が待っているというわけではない。庭付き一戸建てのなかなかの家ではある。しかし、すんでゐるのは優人だけであつた。

優人「あれから5年か……早いもんだな。」

そんな風に思いながら優人は再び歩き出す。そして、自分の家に帰る。悲しみに満ちたあの家へ。家まであと数メートルというところにはさしかかつたその時、

男「貴様ら！」

黒服の男A「さて、そろそろはいてもらおうか。ガイア帝国皇女の居場所を。」

その時、優人はおもいつきりずっこけた。

優人（いきなり、突破されてるじゃねーか！！！！）

男「誰が貴様らなんかに！」

そこにいたのは、横幅に大きい体つきの黒服の男二人と、20代前半くらいの若い男がいた。

黒服の男B「しかし、帝国にザンティスありといわれたお前が下等な地球人の真似事とはな。」

ザンティス「下等だと・・・」

黒服の男A「ああ、魔法も使えない下等な奴らだ。そんな人種を飛ばうなんてお前らガイア帝国は変わってるよな。」

今の会話ではつきりとわかった。このザンティスとかいう男がサクラの護衛の奴で、そして2人がその敵ってことが。

ザンティス「彼らは下等人種なんかじゃない！！！！少なくともお前らほどではな。」

黒服の男B「よくほざくぜ。魔法の使えない野郎がな。」

その時、

優人「さがってな。」

優人はザンティスの前に出て、黒服の男たちの前に出た。

ザンティス「き、君どきなさい。」

優人「話はあるんだけどこのお姫様から聞いてるよ。さすがに地球人を馬鹿にするとは黙ってられねーよ。」

ザンティス「し、しかし。」

優人「怪我してんだろ。ま、任せとけて。」

黒服の男A「おい、地球人。命が惜しかったら家に帰ったほうがいいぞ！」

黒服の男B「ああ、地球人が俺たちに勝てるわけないからな！」

優人「はー地球人、地球人ってうぜーな。誰だろうと関係ない。か

かつてこいよ、家畜ども」

黒服の男A「な、なに」

黒服の男B「家畜だと」

怒り心頭に向かつてくる黒服の男たち。

黒服の男A「くられ、ファイヤ・」

魔法を詠唱しようとしたそのときに、すでに優人は間合いに入っていた。その瞬間に渾身の左ストレートが決まる。そして、黒服の男Aは後ろによろめく。

優人「どうした？うたないのか？ファイヤーなんちゃらってやつは。

」

黒服の男B「このやろう。よくも！」

その時にもう一人の男が優人を魔法でねらっていたが、ザンティス「させるか！！！」

すかさず、ザンティスが黒服の男Bに体当たりをくらわし、いきおいよく突き飛ばされる。すかさず、ザンティスは優人のもとにいき、背中合わせの状態で黒服の男たちと向かい合う。

ザンティス「無茶をしないでください！」

優人「武器も何も持たずに体当たりしてるやつに言われてもな」微笑をうかべながら優人はいった。

ザンティス「しかし、」

優人「こうなった以上」

ザンティス「やるしかない！！！」

優人「やるしかねー！！！」

結局、2人の黒服の男は優人とザンティスによって葬られた。

優人「いや、殺してねーし！」

ザンティス「誰に突っ込んでるんですか……」

優人「うるせー！」

ちなみに黒服の男たちはザンティスが拘束し、どこからか部下らしき男たちによってサイコティス星に連行されていた。

ザンティス「しかし、なんて無茶を・・・魔力をもつものに向かってくるなんて」

優人「あんたも、結局魔法使ってねーだろ。」

ザンティス「私はこれでも・・・」

何かを言おうとして、黙るが

優人「気にするな。事情はだいたいは知ってるからな。」

ザンティス「そうですか。サクラ様のクラスメイトの方でしたか。」

優人「まあな。」

ザンティス「いやーよかったですよ。サクラ様も転校初日にもうお友達ができるなんて。」

優人「別に友達ってわけじゃ・・・」

ザンティス「これからも、サクラ様と仲良くしてくださいね」

優人「護衛や家来でっていうより完全な父兄だな。」

若干呆れ気味の優人だが、ザンティスという男はニコニコしている。年は25、6といったところだろうか。背は優人より少し高い。

優人「あんたいつからサクラの護衛やってるんだ？」

ザンティス「私が12のときですからね。もう12年になりますね。」

優人「12ってそんなときから軍人やってるのか。」

ザンティス「まあ。といっても、そのころは軍人というよりはサクラ様たちの遊び相手というかんじでした。」

優人「へー。しかし、あいつ全然皇女に見えねーな。」

ザンティス「ハハハ。まあ、そういう堅苦しいのが嫌いな人ですからね。」

優人「あんたも軽いよな。てつきり、姫様とかいってるだけですが。」

ザンティス「まあ、国の雰囲気もゆるいですからね。皇帝陛下なんて下町で駄菓子ねぎってますよ。」

優人「おいおい・・・」

ザンティス「まあ、そんな感じですよ。だから、サクラ様のことも普通のご友人と同じように扱ってください。サクラ様もそれを望んでいますから」

優人「俺に友人はいないんだよ。そんなもんいない。それにいらねーよ。」

ザンティス「なぜです？」

優人「別に・・・ほしいと思わない。それだけだ。」

ザンティス「・・・（この少年、なんて悲しい目をしてるんだ）」

優人「なあ、一つ聞いてもいいか？」

ザンティス「はい？」

優人「あんたは、宿命とか運命とかを信じるか？」

ザンティス「信じてますよ。」

優人「それって打ち破れるものなのか。それとも・・・」

ザンティス「確かに宿命を打ち破ることはできないでしょう。」

優人「そうか・・・じゃあ、あんたはどうするんだ。」

ザンティス「宿命の旅路という名の人生を楽しむだけです。」

優人「そっか。俺には無理だな・・・ほんと」

同じ思い

翌日。学校の教室にて、

サクラ「おはよ。優人君！」

優人「・・・・・・（またかよ。）」

サクラ「昨日、ザンティスから聞いたよ。私のお友達になってくれるって言う話。」

優人「んなこといってないのだが・・・・（あのやろう・・・・）」

サクラ「え？違うの？」

優人「ちげーよ。なんでお前と・・・・」

そのとき、サクラの目が涙目になりかけていた。そして、

男子生徒A「お前、サクラちゃん泣かせてんじゃねーよ」

女生徒A「さいてー」

なんやら、がやがやと集まってきた。

優人「めんどくせーな。」

その瞬間、

男「おい、お前ら席につけ。もうすぐHR始まるぞ！！」

男子生徒B「でも、風間こいつ・・・・」

風間「いいから早く席につけ！」

結局集まった連中はみんな席に着いた。優人は不愉快に思ったのか一時間目は姿を消した。2時間目からは授業にでていたが。ちなみに彼の名は風間俊介。このクラスのクラス委員長だ。優等生扱いメガネをかけているが、スポーツ刈りでがたいもしっかりしている。野球部のキャプテンでもある。

サクラが優人に相手にされずいて、へこんでいると、

女「何？もしかして、ふられたの？」

サクラ「へ・・・・」

女「あいつ、女の子泣かすなんて・・・・」

サクラ「いや、そういう意味じゃないんだけど・・・・」

女「あ、私笠井純子。よろしくね。」

この笠井純子は背はサクラとほぼ同じ背丈（150センチ中盤）ほどで、かなりの美人である。それでいて、気が強そうなオーラを放っている。

サクラ「あ、よろしくです。笠井さん。」

純子「純でいいよ。純で。」

サクラ「じゃあ、純さん。」

純子「そうきたか・・・かたいよー純でいいってば。」

サクラ「そうですか。じゃあ、純ちゃんでもいいかな。」

純子「そうそう。私もサクラって呼ぶから。」

サクラ「純ちゃんもやっぱり、優人君と仲良くするとかいうの？」

純子「別に？私はそうは思わないよ。てか、なんで友達を作るのに他人に束縛されるのよ。ばかばかしい。私はあいつとそこまで接点ないし、今までクラスも違ったから会うこともなかっただけ。あいつのこと気に入ったならそれでいいじゃん。」

当たり前という感じで、純子はさらっといった。

サクラ「純ちゃんって、意外とやさしいんですね。」

にっこりとサクラは言うのと、

純子「意外はよけいなんだけどな・・・。」

という感じで、2人は意気投合していくのであった。

昼休み。前日こそ、転校生ということもあってサクラに寄ってくる生徒がいつぱいいたのだが、橘優人とかかわりを持つとした故か、純子を除くクラスメイトはよりつかなくなった。無論、そんなのおかまいなしに優人と話しかけようとするサクラに優人はシカトをきめこんでいる。

純子「サクラあんたもあきないね。」

サクラ「うん。でも、なかなか話しかけてくれないからね。」

純子「サクラはなんであいつと仲良くなりたいの？」

サクラは昨日の事を話した。

純子「そっか。なるほどね。」

サクラ「だってね。私あんな悲しい目をしてる人初めて見たの。すごくつらそうで、でもどうしようもない見たいな感じで・・・だから、助けてあげたいなって思ってた。」

純子「そっか・・・まあ、がんばんなよ。」

そして放課後。

サクラ「純ちゃん！一緒に帰ろうよ。」

純子「あ、ごめん！先帰ってて。ちよつと用事が・・・」

サクラ「そっか・・・それじゃあ、仕方ないね。」

純子「ほんとごめんね・・・明日は一緒に変えろ！」

サクラ「うん。じゃあ、またね。」

サクラはにつこりとして、こたえた。純子が教室から出ていく、そのとき

風間「春日井さん。」

委員長の風間がサクラに話しかけた。

サクラ「はい？」

風間「少しいいかな？君に用があるんだ。」

サクラ「なんですか？別に用事はないですけど・・・」

風間「君と話がしたい。今から15分後に生徒相談室に来てくれ。」

生徒相談室とは、よく生徒の相談をきくカウンセラー達がいるところである。しかし、この日はカウンセラーの人が休んでいたため空き教室となっていた。

風間「使用の許可はとってある。来てくれるかな？」

サクラ「別にいいですけど。」

風間「ありがとうございます。もしかしたら長くなるかもしれませんが・・・」

サクラ「いえ、別に用事もないですし、とても大事なことでし
よう？。」

サクラは風間の表情が真剣そのものだったからである。

風間「ありがとうございます。では、待ってます。」

真面目な表情を崩さずさっさと出て行った。

そして、15分後の生徒相談室。

風間「待っていましたよ。安心してください。ここの使用許可はとっております。ちょっと話ずらい話でして」

サクラ「はい。」

風間「単刀直入にいうと、橘優人の事です。」

サクラは確信した。風間は不良で有名な橘優人に近づくなと委員長自ら警告するために自分呼んだのだと。

風間「君は彼と仲良くなりたいたっていたようだが……」

サクラ「そんな話ならしたくありません。さよなら。」

さすがのサクラも怒りをあらわにした。風間の話を最後まで聞か

ずに踵を返して帰ろうとしたその時、

純子「お、サクラ。もう来てたんだ。」

サクラ「純ちゃん？」

純子「俊介。どこまで話した？」

風間「まだだよ。」

サクラ「どういうこと？純ちゃん……」

純子「え？ああ、私の彼氏。」

風間「まあね。」

サクラ「そんな……純ちゃん……純ちゃん言ったよね？友達を作るのに他人に束縛されるなんておかしいって……あれはうそだったの。」

純子「え？いや、サクラ？」

サクラ「みんなおかしいよ！！だって、優人君何もしてないじゃん。ほんとはやさしい人かもしれないよ。現に私は少し話してみても心が温かい人だと思っただよ！！！！少しの誤解や噂で人を決めつけて、のけもにするなんて……絶対におかしいよ！！！！」

涙がほほから零れ落ちて、サクラは叫んだ。どうせこの人たちは、鼻で笑われるのかと思った。しかし、笑うには笑われたが、鼻では笑われなかった。

純子「サクラ、あんたすごいこじやん・・・やっぱ私の目に狂いはなかったよ・・・」

そういつてサクラの涙をぬぐった。そして、頭をなでながら抱きつく。サクラは、頭の中がクエッションマークでいっぱいになる。そして、

風間「ハハハ。なんか、誤解させちゃったみたいだね。」

さっきの真剣な表情ではなく、さわやかな笑顔でそう言った。

「サクラへ？」

純子「あんたが、紛らわしい言い方したからでしょ……あとで、クレープわたしたちにおごりね……！」

風間「なんで、純子まで……」

純子「私の友達泣かしたからね!!!」

風間「
・
・
・
・
」

さらに？がふえるサクラ。

サクラ「あの〜どういふ……」

風間「ああ、ごめん。話っていうのは君の最初に想像してたことと逆の事なんだ。」

「サクラ、え？」

風間「優人君がクラスに溶け込むのを手伝ってほしいんだ。」

「サクラ、え？」

風間「知っているよ。彼がどれだけ心の優しい人かってことを。」

「サクラえ。」

純子「俊介はね。橘君の幼馴染なの。」

[illegible]

風間「まあ、昔から喧嘩ばつかなのと、口が悪いのは変わってないんだけどね。」

笑いながら風間は言った。

サクラ「でも、よかったです。私と同じ気持ちの人がいて。」

風間「僕は今こそクラス委員長であり、野球部のキャプテンもやらせてもらってるけど、昔はただのいじめられっ子だったよ。」

サクラ「そうなんですか！！！」

純子「信じられないよね。」

風間「そんなとき、なんやかんやいって助けてくれたのが優人君だったんだ。まあ、たまにいじわるもしてきたけど。」

サクラ「そうなんですか。」

風間「なつかしいな。あの頃は。」

それから風間はサクラ達に昔話を聞かせるのであった。

思い出のクリスマス

今から8年前。橘優人、風間俊介が小学校4年生の頃の話。

優人「おい、俊介！いつまで泣いてるんだよ。さつさと帰るぞ！！」

俊介「……………」

まだ俊介は泣いている。

優人「お前もう4年生だろ！泣くなよ！」

俊介「うん……………」

優人「たく、お前反撃しないから一方的にやられるんだよ。ちつとは反撃しろよな。」

俊介「だって……優人君がやられてだまってないでやり返せよ！それが無理なら先生にちくってやれっていったから……」

優人「だから、加勢してやっただろ。」

当時の風間俊介は、内気な性格からクラスの男子生徒にいじめられていた。いつもは無抵抗にやられる俊介であったが、優人の助言で先生に話すことができた。しかし、

いじめっ子A「おい、橘！！さつきはよくもやってくれたな！！」

先生にちくられたことで俊介はいじめっ子5人に一方的にやられていたのだが、優人によっていじめっ子は全員ボコボコにされたのだった。

優人「あーあ。上級生連れてきやがった。」

俊介「優人君……逃げようよ……………」

6年生4人、5年生6人もいる。

優人「どうやって、これだけの人数集めたんだろうな。」

優人はびっくりしたように言った。

上級生「やっちまえー！！！！」

上級生といじめっ子の計15人が優人に襲いかかる。

そして……

優人「ちえ、口の中きつちまったじゃねーか……」

俊介「いや……上級生10人がかかりで口しか切ってないほうが異常だよ……」

優人によつて、失神してる上級生8人、クラスメイト3名。逃亡者2名。失神はしてないものの、立てずにもがいてる上級生2名。

優人「そっか？普通だろ？ほら……俊介先生来る前にさつさと帰るぞ！！あと、帰り道に駄菓子屋でも寄つてなんかおこれよ！」

俊介「突っ込むとが多すぎて……何から言ったらいいのか……」

さつきまで泣いていた俊介は冷静に突っ込み側にまわろうとしていた。

優人「ほら！さつさと行くぞ！！！」

俊介「駄菓子屋いつでも何もおごらないよ！」

優人「ケチ……命の恩人に対して……」

俊介「いや、大げさだって……」

優人「ちえ……」

俊介「あ、そういえば今日お母さんがケーキ焼くつて言つてたから。」

優人「よし、行くぞ」

俊介「ははは、僕のお母さんのケーキ、優人君好きだもんね。」

優人「ああ、そのためにお前を助けたからな。」

俊介「ちよ……」

優人「よし、行くぞ！！！！ケーキ♪ケーキ♪」

優人は俊介の肩に手をまわして、優人と俊介は肩を組みながら帰っていったのだった。

時は戻って現在。

サクラ「へー。昔はもうちょっと親しみやすかったんですね。優人君。」

純子「てか、上級生10人を失神させたとか……」

俊介「うん。でも、すごく優しい人だよ。名前のとおりね。」

純子「今の姿からは全く想像できないんだけど……」

俊介「僕もそのころはそこまで優人君のこと好きだったわけじゃないよ。」

サクラ「そうなんですか？」

俊介「確かに、僕らはよく一緒にいたよ。ただ、その時はただ一緒にいるって感じだった。でも、ある出来事がきっかけで僕らは仲良くなったんだ。」

時は2人が小学4年生の冬。クリスマスまであと1週間というところか。

優人「おい、俊介。何してんだ？」

俊介「編み物。」

優人「男が編み物かよ。」

俊介「ハハハ……似合わないよね……」

優人「なんでそんなもんやってんだ？」

俊介「実はクリスマススイブにお父さんが帰ってくるんだ。」

優人「ああ、そういえば、お前の父さん仕事で外国いつてるんだっただよな。」

俊介「そうなんだ！これからは、日本にずっといるんだよ！」

優人「へー。よかったじゃないか。（いつもおとないしいこいつがこんなにはしゃいでるとはな）」

俊介「でね、これからお父さんお仕事行く時、きっと寒いと思ってこの間まではすごく暑いとこだったから。だから、マフラーと手袋を編んであげようと思って……」

優人「？」

俊介「やっぱり……気持ち悪いよね……男が編み物なんて……」

「
優人「何言ってんだよ。」

俊介「？」

優人「そりゃあ、ぶっちゃけ変だよ。でも、それはお前の父さんにとってきつと最高のプレゼントになるのは間違いない。だから、必ず完成させる！いいな！」

俊介「……うん！がんばるよ！」

優人「……お前の邪魔してくる奴がいたら、俺がぶつとばしてやるからさ……だから、安心して作業してていいぞ。」

俊介「あ、ありがとう。」

それから、俊介は一生懸命にマフラーと手袋を作った。何度か邪魔はあったが、優人がいつも守ってくれた。優人は俊介をずっと励まし応援していた。そしてクリスマスイブ当日。

放課後。学校の教室で

俊介「できたー！」

優人「しかし、お前すげーな……。まさか2人分のマフラーと手袋作るとは……」

俊介「ハハハ……。一度コツつかめばなんとかできるよ。ぎりぎりだったけど。」

俊介はお父さんの分だけでなくお母さんの分も作っていたのだ。

優人「お前を生まれて初めてすごいと思ったよ。」

俊介「そういうことは思ってたもいわないでよ……」

優人「ハハハ。よし。さっさと帰ろうぜ。しかし、寒いなー・雪降りそうだな。」

俊介「そうだね……」

優人「俊介。顔にやけてるぜ。」

俊介「そりゃうれしいよ。でも、小学校にはいつからお父さんずつと海外出張で……。誕生日も運動会もクリスマスもお正月も……。お父さんいなかったから……。だから、久しぶりにお父さんに会え

てうれしいんだ。」

優人「・・・・・・」

俊介「あ、ごめん・・・優人君・・・お父さん・・・」

優人「え、ああ、気にするなよ。俺は顔も知らないし、最初からいないからさみしいも何もないよ。それに、母さんがいるからな。さみしくなんかないよ。」

俊介「そっか・・・優人君強いね。やっぱり。」

優人「違うよ。母さんが俺の事すごく大切にしてくれてるから・・・だから、さみしくないだけだ・・・母さんがいなくなったら、って考えただけでぞつとするよ・・・」

俊介「優人くんはお母さんにプレゼントしないの？」

優人「え？言ってなかったか？おばさんに頼んでキッチン借りるって。」

俊介「え？」

優人「お前みたいにマフラー作れないから・・・材料買って俺の家にもってくんた。びっくりさせようと思ってね。母さんは母さんでなんか作ってるだろうし。」

俊介「優人君、料理作れるの？」

優人「いつも俺が作ってるよ。母さん仕事で疲れてるし。」

俊介「すごいね。」

優人「よし、行こうぜ。あ、トイレ行ってくる。」

俊介「あ、じゃあ、ここで帰り支度して待ってるよ。」

優人「おお！すぐすませてくる。」

優人を待つているときに、

俊介「さて、帰る準備するかな。」

いじめっ子A「おい、帰るには早くないか？」

俊介「！！！」

いじめっ子B「そうだよ。お前のせいで最近先生に怒られてばっかだよ。」

俊介「自分たちがいけないんじゃないか！」

いじめっ子C「うるせー!!!」

いじめっ子D「お前、前までは俺達のいいなりだったよな。」

いじめっ子E「友達のいないお前なんか仲良くしてやった恩を忘れたなんていうなよな。」

俊介「何が友達だ！僕にさんざんひどいことしておいて、もうお前らなんか言うことなんか聞かないぞ！」

いじめっ子A「おい、橋に守ってもらえるからってえらそうにすんなよ。風間のくせに」

確かに俊介にとって優人があることはとても心強かった。しかし、いじめっ子B「残念だけど、あいつは助けに来ないよ！」

俊介「え・・・」

いじめっ子C「上級生がトイレで待ち伏せてたからな。前より多い人数で。」

いじめっ子D「お前を助けに来るやつはいない。さあ、どうする？」
笑いながら俊介をみるいじめっ子たち。しかし、俊介は逃げなかった。

いじめっ子E「は？何だ。」

俊介「僕は逃げない。そして、お前らを許さない・・・」

いじめっ子D「何？」

俊介「僕はお前らは倒して・・・優人君を助けるんだ！!!!」

俊介は5人に殴りかかった。殴られたり、蹴られたり、それでも立ち上がって反撃した。ただ、友達を助けるために。しかし、

いじめっ子B「ちえ・・・風間にしてはやるな・・・」

俊介「かなわなかった・・・無理だった・・・くそー」

いじめっ子A「おい、こいつ手作りのマフラーなんか編んでるぜ。」

いじめっ子C「女々しい風間らしいな。ハハハ。」

一斉に笑いだす。

俊介（くそ・・・取り返さなきゃ・・・お父さんとお母さんのマフラー・・・）

俊介はいうことをきかない体を震え上がらせようとするが、いじ

めっ子のひとりに頭を踏みつけられていて立てない。

俊介「返せ！それは、お父さんとお母さんにプレゼントするんだ！
！！」

いじめっ子D「いいこと聞いたぞ！おい！これどっかに捨てにいこうぜ！」

いじめっ子B「ああ、俺達に逆らった罰だ。」

俊介「くそー・・・」

優人「その手を離せ！！！！お前ら！！！」

いじめっ子A「橘！！！！！」

いじめっ子E「馬鹿な！！！！どうやって・・・」

優人「3人くらい増えたって俺の敵じゃないんだよ・・・お前らは・・・俺を本気で怒らせたみたいだな・・・」

優人はいつになくキレていた。

いじめっ子C「やつちまえ！！」

一斉に襲いかかるが・・・

優人「・・・」

いじめっ子A「くそー・・・つえー・・・ぎゃああ！！！」

優人はおもいつきり腹にかかとおとしをくらわす。

優人「お前らにわかるか・・・こいつの気持ちを・・・お父さんは外国で仕事、お母さんは夜までずっと働いてる。学校でも、こいつはずっとおまえらのせいでひとりぼっちだ・・・そんな気持ちがお前らにわかるか！」

そうやって、もう一人のいじめっ子をもう一回殴りつける。

優人「しかもおまえらは、こいつの努力を・・・こいつの思いを・・・」

俊介「優人君・・・（そうだ。優人君が僕に話しかけてきたのは、ちょうど、僕のお父さんが外国行って、お母さんが夜遅くまでパートで働き始めた時だ・・・そうあの時・・・）

優人「ねえ・・・風間君」

俊介「え・・・な、何？」

優人「僕の家おいでよ！ご飯僕の家で食べようよ！」

俊介「え？あ、あの・・・」

優人「ほら、行くよ！」

そうやって、僕の手を無理やりとり、無理やり自分の家に連れていくのだった。

優人「お母さん・・・」

優人の母「おかえり。あら、お友達。」

優人「そう、前話してた風間君。」

俊介「お、おじゃまします。」

優人の母「いらっしやい。ゆっくりしてってね。」

そう笑顔でいうのだった。

優人「こいつのお母さん、夜遅くまで働いてるんだ。」

優人の母「あら、お母さん大変ね。じゃあ、ご飯は？」

俊介「今日はお弁当屋さんでご飯食べようと思ってましたけど・・・

優人君が・・・」

優人「なら、一緒にご飯食べようと思って・・・お母さん、いいでしょ？」

優人の母「私はいいけど、帰ってきて風間君がいなかったらお母さん心配するからな・・・お母さんの携帯電話の番号わかる？」

風間「はい。」

僕の母の携帯に優人君のお母さんが電話することになった。

優人の母「お母さんの了承は得たから、ご飯食べていきなさい。あと、お風呂も。優人のパジャマで大丈夫そうね。風間君のお母さん、仕事終わったら迎えに来てくださるそうよ。じゃあ、大急ぎで夕飯の材料買ってくるから2人で留守番しててね。」

優人「はいよ！風間君ゲームしよ！」

俊介「うん。いいよ。」

その日はほんとに楽しかった。いつも、一人ぼちでさみしかった僕に優人君とおばさんはとてもやさしくしてくれた。優人君はき

つと、さみしい思いをしてる僕の事がほつとけなかつたんだ。父親
がいない・・・優人君はそう言ってるけど、父親のいなくてさみし
い思いをしてないわけはないんだ。そんな、やさしい優人君の事
が好きだから僕は・・・・・・・・

俊介「おおおおおおお！」

いじめっ子をおもいつきりぶんなくる俊介。

優人「俊介やるな。」

俊介「へへへ。じゃあ、わからせてやろうよ。これから僕らに逆ら
うとどうなるかを・・・」

優人「お前・・・キャラまで変わってるぞ・・・」

そして、そこからいじめっ子と僕らの大喧嘩が始まった。いつも
の優人ひとりじゃない。優人には、もう一人の存在がとても大きか
った。

しかし、派手にやりすぎたため・・・先生に怒られてしまった。

悲しみの果てに

先生「たく、また橘か・・・それにいつもおとなしい風間までどうしたんだ。」

優人「先生。」

先生「なんだ？」

優人「こいつは悪くないです。悪いのは俺だけだ。」

先生「しかし、2人でやったと聞いているのだが。」

優人「俊介はマフラーと手袋を守ろうとしただけです！単身赴任だった父親が今日帰ってくるんです。外国から帰ってきたお父さんといつも働いてるお母さんにマフラーをあげようとしただけなんです！」

先生「・・・。」

優人「この一週間、ずっと・・・ずっと一生懸命やってたんだ！それをあいつらが、踏みじろうとしたから・・・だから・・・。」

先生「そうなのか？風間」

俊介「はい・・・。」

先生「そうか、まあ、それはあいつらにもよくいっておこう。しかし、暴力はな・・・。」

そんな感じで先生の説教を1時間近くうけ俺たちは解放された。

優人「これでやつらもお前に手出しはしなくなるな。」

俊介「優人君・・・。」

優人「なんだ？」

俊介「あのと看・・・どうして、僕を家に呼んでくれたの？」

優人「あのと看って・・・小1の終わりのときか？」

俊介「うん・・・。」

優人「さあね、忘れた・・・。」

俊介「そうなんだ・・・じゃあ、なんで僕の事いつも助けてくれる

の？どうして……」

優人「理由なんてないよ。だって、俺たちは」

俊介「え？」

優人君はそれからにつこりと微笑んで言った。

優人「友達だろ。」

そういわれたときに僕はうれしさのあまり涙をながしてしまった。

優人「おい……どうしたんだよ……俊介……」

俊介「……何でもないよ……」

時は戻って現在

純子「へー案外俊介って涙もろいんだねー。」

純子にはにやにやして俊介をみてる。

俊介「純子にははなすべきじゃなかったかな……」

サクラ「でも、いいですね。男の子同士の友情って……」

純子「でも……おかしくない？そんなに仲良かったのになんでそんな疎遠になってんのよ？」

俊介「……さっき話したからわかんと思うけど……優人君は

お父さんがいない。」

純子「母子家庭ってやつ？」

俊介「そう。そして、優人君はお母さんのことをすごく大切にしていたんだ。」

サクラ「ああ。所謂マザコンってやつですね。」

俊介「!!」

純子「!!!」

2人とも言葉を失った。

サクラ「あれ、お母さんのことを大切にすることってそういうんじゃないかって……」

俊介「え……えっと……間違っではないことは……」

純子「いや……完全に間違ってるよ……それ……」

サクラ「え……あの……」

純子「サクラ・・・あとで教えたい。」

2人ともへんな汗をかいていたみたいだ。

俊介「こほん・・・まあ、優人君のお母さんはほんとに素晴らしい人だった。美人で、やさしくて、ときにはきびしくて、優人君の事を世界で一番愛していた。でも・・・」

サクラ「でも？」

俊介「・・・」

純子「俊介？」

俊介「優人君のお母さんは・・・」

俊介の口が重くなる。そして、少しの沈黙の後に俊介は口を開いた。

俊介「殺されたんだ・・・しかも、優人君が中学1年のときに・・・」

サクラ「え・・・」

俊介「学校から帰ってきた優人君が見たのは、変わり果てた優人君のお母さんの姿だった・・・」

サクラ「そんな・・・」

純子「殺されたって・・・じゃあ、犯人は？」

俊介「まだ・・・つかまってない・・・その事件は優人君にとって、とても立ち直ることが難しい出来事だった。」

サクラ「うん・・・」

俊介「身寄りがほかにない優人君は優人君のお母さんの古い友人の人に保護者になってもらって、今はひとり暮らしをしてる。」

サクラ「さびしくないのかな？」

俊介「さびしいという感情すらあの人は忘れてしまったのかもしれない・・・」

純子「？」

俊介「優人君には、当時彼女がいたんだ。彼女のおかげで立ち直る兆しもあったんだ。でも・・・」

サクラ「でも？」

俊介「彼女は死んだ・・・交通事故で・・・」

純子「まじ？」

俊介「ああ、立ち直りかけていた優人君を完全にどん底にたたき落とす事件だった。そして・・・」

サクラ「そして？」

俊介「優人君は、町でうろついてる不良たちを半殺しにしてまわったんだ。今まで、優人君が仕掛けることはなかった・・・でも、まるで何かにとりつかれたかのように優人君は変わってしまった。」

サクラ「・・・」

俊介「優人君が我に返ったときに、優人君はすべてを失ってしまった。両親だけでなく、友人も、そして、優人君自身の心も。優人君は言っただ。」

なにもいらない・・・なにも得なければ失った時の悲しみをまた味わうことはないから。

帰宅後、サクラとザンティスが暮らしてるアパートにて。

ザンティス「そんなことが・・・」

サクラ「うん・・・」

サクラは体操座りのような体勢でしばらくだまっていた。そして、サクラ「ねえ、ザンティス。わたし・・・どうすればいいかな・・・」

その言葉にザンティスは即答で答えた。

ザンティス「サクラ様。私はあなた自身の言葉や気持ちを大切にしていけばいいと思いますよ。」

サクラ「わたしの・・・気持ち？」

少し考えて、サクラは立ち上がった。

サクラ「私は・・・橘君を・・・橘君の心を救ってあげたい・・・絶対に・・・」

ザンティス「それでいいんですよ。」

ザンティスがにつこり笑った。

1週間後の放課後。

優人「で……なぜこういうことになる。」

サクラ「♪」

ザンティス「まさか……こんな作戦を使うとは……」

サクラは優人に提案した。自分のボディーガードをしないかと。

優人はひとり暮らし。きつと生活も楽ではない。バイトという名目でザンティスの怪我が治るまでの間サクラの護衛になることに決まった。

優人「なんでこんなことに……」

サクラ「いいじゃん♪暇なんですよ♪」

優人「お前の国にほかの護衛はいないのか？」

サクラ「橘君強いじゃん……下手すればザンティスよりも強いかもしれないよ♪」

ザンティス「まあ、素手で我々と同じサイコティス星人を倒してますからね（笑）」

優人「……」

そして、サクラは大胆にもこのような計画も立てていた。護衛なので24時間常に護衛するとまではいかなくてもせめて家は一緒にあるべきだと。結果、ひとり暮らしで、一軒家に住んでいる優人の家にサクラ、ザンティスが居候するという形で決着がついた。その話がまとまったのが1週間後の今というわけであった。

サクラ「♪」

ザンティス「機嫌いいですね。」

サクラ「まあね。少し安心したから。」

ザンティス「安心？」

サクラとザンティスは優人に聞こえないように小声で話す。優人

はその数歩前を歩いている。

サクラ「だって、もしほんとに橘君の心がなくなっていたのなら、私の申し出に応じるわけないもん。つまり、優人君の心はまだ生きてるってことでしょ？」

ザンティス「かなり時間はかかっていますが……」

サクラ「そうだとしても」

その時、

黒服の男A「ガイア帝国の皇女サクラだな！」

黒服の男B「覚悟……！」

2人が長剣で襲ってくる。その剣をザンティスが剣で受け止める。
ザンティス「くそ……」

黒服の男A「へへ……皇女殿下の護衛が手負いの身とはラッキー
だぜ……！」

そのとき、

黒服の男B「……おのれ……」

優人が短剣でもう一人の黒服の男をぶった切っていた。

優人「安心しろ……急所は外してある。」

黒服の男A「しね……！」

標的をザンティスから優人に変え、突進する。しかし、それを軽くかわしてみせる。

優人「なんか……成り行きでこんなことになっちまったが……一度ひきつけちまったからな……」

優人は、ブレザーを脱ぎ捨て、短剣を両手にかまえて敵と対峙した。

黒服の男A「双剣騎士だと……」

優人と黒服の男は一定の間合いを取る。優人の放つ殺気に黒服の男は思わず後退りする。その瞬間

を優人は見逃さず一気に間合いに入る。右から左から不規則な太刀筋で相手を翻弄し、相手の剣を弾き飛ばし、右の剣を相手の喉笛に

突き付けた。

優人「終わりだな・・・」

黒服の男A「く・・・くそ・・・」

両手をあげ膝をついた黒服の男。

ザンティス「おみごと・・・」

サクラ「すごい！橘君！いつそんな剣術を覚えたの？」

優人「ああ・・・さっきザンティスからとある双剣騎士の奥義書みたいなのやつを渡されてな・・・それ読んだだけだが・・・」

サクラ「・・・読んだだけって・・・」

ザンティス「奥義書涙目ですね・・・」

優人「いやいやいや・・・あの奥義書とんでもないことばっか書いてるぞ・・・瞬間移動して、一気に相手の間合いに入り、両手の剣で相手を切り裂き、相手の背後にまわる・・・瞬間移動すること前提かよ！！！」

サクラ「それはそれは・・・」

ザンティス「それでしたら、確実に地球人離れていますね。」

優人「んなもん渡すなよ・・・」

それから、黒服の男二人を軍に引き渡したのち、3人は優人の家に帰ることにした。

母と子

優人の心境は複雑だった。人との交流を避けてきた優人。そんな優人の前に現れた異星人と名乗る2人

。護衛として、これから2人と暮らすことにはなったが、

サクラ「すごい・・・」

ザンティス「驚きました・・・」

サクラとザンティスは優人の家の前に着いた。それは、とても学生が一人暮らししているとは思えない家だった。庭付き一戸建ての高級住宅であった。庭には花壇や芝

生が広がっている。

優人「まあ、こうなっちまったらしゃーねー。さっさとあがれ。部屋は2階に俺の部屋込みで6部屋ある

から空いてる部屋好きに使え。」

サクラ「はい」

ザンティス「よろしくお願いします。優人殿。」

優人「さて、じゃあ夕飯でも作るか。」

サクラ「橘君、そういえば料理上手なんだってね。」

優人「俊介から聞いたのか。まあ、任せときな。あ・・・」

優人は自分が楽しそうに話してるのに気づいた。

優人（なにやってんだ・・・俺はもう・・・こんな感情は捨てるってあの日に誓ったのに・・・）

サクラ「・・・」

優人は手際よく料理を作り、皿に盛り付けた。

優人「定番すぎて何だが今日はカレーだ。」

サクラ「なんかいろいろ入れてたよね。」

優人「まあな、いろいろ自分で味に改良に改良を加えたものだ。」

サクラ「いただきます。」

ザンティス「いただきます。」

そして、

ザンティス「これは……」

サクラ「美味しい」

ザンティス「地球の料理には美味しい料理が多いとは聞いてましたが、ここまでとは……」

優人「お前らの国には、料理はないのかよ……そんなのでうまいなんて……」

サクラ「えゝすごくおいしいよ。橘印のカレーライス。」

優人「なんか、どつかのメーカーみたいになってるんだが……」
ザンティス「確かに、我が国の料理にも美味しいものはいっぱいありますが、やはり異星の食べ物というものは、珍しいですよ。」

優人「そういうものか……」

それから、いろいろな雑談をしつつ、食事を楽しんだ。といっても、話していたのはほとんどサクラとザンティスだったが。

優人「はあ……」

夕飯の後かたづけを終え、風呂に入り、自室のベットに寝そべりながら優人は考えていた。優人自身なぜこんなことになったのだろう。なぜ、サクラの申し出を受け入れたのだろうか。そんな疑問にめぐっていた。

優人「俺は……」

人のぬくもりを絆を求めているのだろうか。わからない。そう思い、優人は眠りについた。

翌日の土曜日。

優人「なんで、こんなところに・・・」

サクラ「へへへ、いいじゃん、デート、デート」

優人「何がデートだ!!!!!!」

ここは駅前。サクラは町でショッピングというごく地球人の年頃の女の子としてはごく普通のことを

してみたかったらしい。

優人「俺とじゃなくて、友達と行けよな!」

サクラ「だって、橘君は私の護衛でしょ?一緒にいなきゃだめじゃん。」

優人「ザンティスもいるだろ!!!!」

サクラ「だって、ザンティスはおっさんだもん。」

優人「・・・・・・・・」

そして・・・数時間後。

サクラ「あゝ楽しかった、ねえねえ、次どこ行こうか?」

優人「いい加減にしろ!!!!」

サクラ「え・・・・・・・・」

優人「なんなんだよ、お前は!!!!!!さんざん俺をひっぱりまわしやがって、護衛の事といいお前は何がしたいんだ!!!!!!」

サクラ「なにつてそんなの決まってるじゃん。橘君と仲良くなりたからだよ。」

優人「なんで俺がお前と・・・俺はな!!!!!!」

サクラ「もう、誰とも関わりたくないって?」

優人「え・・・・・・・・」

サクラ「ちよつと話そうか。」

サクラと優人は2人でベンチで話した。

サクラ「あの時以来だね。ここで話してるの。」

そうそれは、初めて優人とサクラが話をした公園のベンチだった。

優人「ああ、そうだな。」

サクラ「橘君にはあるとき、お父さんのお話はしたけど、私のお母さんのお話はしてなかったよね？」

優人「ああ・・・」

サクラ「私のお母さんは、敵国の暗殺者によって殺されたの。」

優人「え、じゃあ・・・おまえも？」

サクラ「うん・・・橘君と同じ・・・」

優人「そうか・・・」

サクラ「だからこそ、私は橘君には取り戻してほしいの。橘君が4年前に亡くしたものを！私は、そのきつかけをつくりたくて。橘君のお母さんだつて・・・」

優人「だまれ！！！！お前になにがわかる！！！！母さんは俺のせいで死んだんだ・・・」

サクラ「嘘よ！！！！」

優人「嘘じゃねー！！！！俺があの時出かけなければ、母さんを助けたかもしれない・・・そうじゃないとしても、一緒に殺されていたら・・・こんな悲しみを背負う

こともなかったのに・・・」

サクラ「そんなの・・・そんな橘君の姿・・・お母さんが喜ぶわけない！！！！絶対に！！！！」

優人「なぜお前がわかる？勝手なことばかり言いやがって！」

それから、サクラは何かを詠唱している。そして、

サクラ「今魔法でやってみてわかった。私の言ったことを裏付ける物が橘君の家の庭にある物置

にある」

その言葉に優人は唖然とした。

優人「なんで・・・そんなものが・・・」

サクラ「橘君、帰ろうか。その物を探しに。」

それから、優人、サクラ、ザンティスの3人で倉庫の中を捜した。

ザンティス「しかし、きれい好きの優人殿とは思えないくらいごちやごちやしてますな・・・」

優人「ああ、母さんがしんでから手つかずだったからな・・・」

サクラ「あつた！絶対これ！！」

サクラが見つけたのは、一つの段ボールだった。中にはぎっしり何かが入ってる。

ザンティス「なんか、本みたいなものが入ってますね。」

サクラから箱を受け取ったザンティスが箱をもって言った。

優人「アルバムは母さんの部屋にあるし・・・なんなんだ・・・」

その段ボールをに持って家に入り、居間のテーブルの上に置き、3人は座った。

ザンティス「あ、我々はいないほうが・・・」

優人「いや、いろ。」

サクラ「いいの？」

優人「悪かったな。お前がせっかく見つけてくれたものだ。俺はたとえどんなことがあつたとしても、

もう逃げたりしない。現実と向き合ってみせる。」

ザンティス「・・・」

優人は段ボールを開けた。そこにあつたのは、数十冊のノートだった。

サクラ「ノートだね。」

優人「なあ、春日井。お前が先に見てくれないか・・・まだ決心がつかない・・・」

サクラ「・・・うん・・・わかった。」

サクラは一番上にあつたノートを手にした。そして、そのノートを開いた。その瞬間

サクラ「！！！！！！」

サクラはノートをすぐ閉じた。どうやらそのノートが何なのかすぐにわかったらしい。

優人「どうした？」

サクラ「だめ・・・これは橘君だけのもの。」

優人「え？」

サクラ「読んでみて。」

優人はうなずくと、段ボールに入ったノートを一冊手に取り、ページを開いた。

優人「これって・・・」

そこに記されていたのは、優人のお母さんが書いた日記だった。

優人「19。年、4月1日今日は優人の小学校の入学式だった。

幼稚園でもやんちゃなことばかりしてた

からちよつと不安かな。でも、やっぱり素直にうれしい。優人、いっぱい友達できるといいね。」

日記を読みあげる優人。

優人「母さんの字だ・・・」

それから、優人は日記読み進める。

19。年、今日は仕事でミスして、上司にすごく怒られた。へこんで帰ってきた私を笑顔で「おかえり

。」って言ってくれた優人。優人の笑顔をみたら、さっきまで落ち込んだのも忘れちゃった。毎日優

人と一緒にご飯を食べたり、お話したりするのが本当に楽しい。よし、明日も頑張ろう！

19。年、7月。蒸し暑い夏。優人がお友達を連れてきた。お母さんが夜遅くまで働いているそうで、一

緒にご飯を食べることになった。優人、いいお友達ができてよかったね。

19。□年、12月16日。もうすぐ、クリスマス。優人は何をプレゼントしてくれるのかな。楽しみ。優

人に楽しみにしててねっていわれた。私もクリスマスはごちそう作らないとね。でも、最近、優人の料

理のうでがどんどんあがっていつて追い抜かされるかも・・・これから、男も料理する時代だもんね

。あ、そういえば、風間君はお父さんとお母さんにマフラーを編んでるらしいわ。すごいね。でも、いじめっ子に邪魔されるとか・・・
・優人は風間君を守るんだって。優人、友達思いに育ったね。お父さんに似たのかな。そういうところは。

優人が手に取ったのは、優人が小学生の頃の日記らしい。それから他の日記も読んでみた。そこには

優人が生まれてからほぼ毎日書かれていた。

優人「母さん・・・」

サクラ「橘君？」

優人「母さんは、本当に幸せだったのだろうか・・・女手一つで俺を育てて、きつといろいろなものを

犠牲にしてきたはずだ・・・それは・・・」

ザンティス「・・・（優人殿を苦しめていた本当の理由は、自分の存在に対する自己嫌悪だったのか

もしれない。自分がいたから、母は苦しみ、恋人も死んだのかと・・・そんな極度の被害妄想がすべて

の原因なのかもしれない。しかし・・・まさか・・・）」

下をむいてる優人に対して、サクラは言った。

サクラ「これ、私が最初に読んでしまった日記の最期のページ。」

19。年7月7日。それは、紛れもなく優人のお母さんの命日だった。

そのノートには、ただ一言こう書かれていた。

優人、生まれてきてくれてありがとう。

優人「はあ・・・ああ・・・」

優人は自分の恋人の葬式のと看から涙を流さなかつた。ずっと、ずっと。そして今、

優人「どうして・・・どうしてなんだよ・・・どうして、最後の最後にそんなことを・・・そんな言

葉を・・・」

サクラ「お母さんってすごいですよね。」

優人「え」

サクラ「橘君の幸せは自分の幸せ。そう思えるのが、母親であり、家族なんです。だから、橘君も・

自分の・・・幸せを・・・」

サクラは言葉を続けられなかつた。

優人「なんで、お前が泣いてるんだよ。」

サクラ「すいません・・・なんか・・・」

そこで優人はサクラにハンカチを渡して

優人「ありがとな。」

サクラ「はい。」

サクラは涙を眼にためたままにつこりと笑った。

優人「な・・・」

優人は顔を少し紅くして顔をそむけた。

心地いい時間

話は前回から少したつて、一か月後。押しかけてきた異星人（といつても、姿かたちは地球人と変わらないが・・・）人と人とのかわりをさけてきた優人。いろいろあったが、そんな優人たちにも変化が・・・

優人「おゝい！サクラ起きろ！！！」

サクラ「むにやむにや・・・あと、5分・・・」

優人「なんで俺が・・・ってかなんのフラグだよこれ・・・」

サクラをたたき起して、2人で2階から降りてくる。

ザンティス「おはようございます。サクラ様。」

サクラ「おはようザンティス」

ザンティスはすでに優人が作っておいた朝食をテーブルに並べている。何とも気の利く男だ。

優人「しかし・・・妙な感じだな・・・こういうのも・・・」

優人はこんな風に3人で暮らしている自分が妙におかしくなった。

サクラ「あ、優人君笑った？」

ニコニコとサクラが優人の顔を覗き込みながら言った。

優人「いいからさっさと食え」

覗き込んできた、サクラの額にデコピンする。

ザンティス「いつてらっしやゝい」

ザンティスの見送りで、2人は学校に向かった。

優人「あいつ・・・完全に主夫だな。」

サクラ「エプロンしてたら完璧だね。」

優人「今度買ってきてやるか。」

サクラ「そうだね。」

2人はそう言って笑った。

サクラ「でもよかったの？私もう優人君に危険な目にあってほしくないから、代わりの護衛を本国からよこそうと思ったのに・・・」

優人「お前から俺に護衛やれって頼んだんだろうが。」

サクラ「でも・・・それは・・・」

優人「いいんだよ。約束通り、ザンティスの怪我が治るまでお前のこと守ってやる。例え、どんな敵が現れたとしても。」

サクラ「優人君・・・」

優人「俺はお前に感謝してるんだ。いろいろな・・・それに、あの日ザンティスが言ったことも気になる。」

それは、あの優人の母を日記を見つけた時の話だった。

ザンティス「何か・・・妙ですね。」

優人「え？」

サクラ「どうしたの？ザンティス。」

ザンティス「何か・・・優人殿の心や行動、精神状態が不自然というか・・・その・・・」

優人「何が言いたい？」

ザンティスは一呼吸おいて、ただ一言こいつた。

ザンティス「精神操作」

優人「!!!!」

サクラ「まさか・・・魔法・・・」

ザンティス「優人殿のお母さんの犯人は捕まっていない。そして、優人殿のお母さんが殺された時、あなたは本当にでかけていたのですか？」

優人「まさか・・・その時の記憶も・・・」

優人は膝をついてうなだれた。

ザンティス「その可能性も・・・」

サクラ「ザンティス!!!!」

サクラはザンティスに詰め寄った。

サクラ「ザンティス！橘君の気持ちを考えて・・・」

言おうとした瞬間、サクラの手を優人が握っていた。」

優人「いいんだ・・・俺はもう大丈夫だ。ありがとう、春日井、ザンティス・・・」

サクラ「橘君・・・」

ザンティス「親子の絆は魔法よりも強いということですね。やはり。」

サクラ「そつか。てか、ザンティス気がついてたの？」

ザンティス「ええ。彼の瞳に悲しみが消えていましたからね。」

サクラ「じゃあ、その犯人を探すの？」

優人「いや、そうじゃない。俺がお前の護衛を続けたいのは・・・

その・・・俺がお前を・・・その

・・・」

サクラ「？」

優人「なんでもねー。仮にその犯人が現れたら、捕まえる。それだけいい。」

サクラ「そつか。」

サクラは微笑んだ。

優人「ああ（もう2度と失ってたまるか・・・絶対に・・・）」

学校の校門の前、優人とサクラは登校してきた俊介と純子に出会う。

純子「サクラ」

サクラ「純ちゃん」

2人抱きあう。

優人、俊介「お前ら付き合っちまえよ・・・」

ずっこける女2人。

純子「いやいやw私たち2人とも目の前に彼氏いるから。」

サクラ「え。」

優人「な・・・おまえ、なにいつて・・・」

頬が紅くなる優人とサクラ。

純子「あ、橘顔赤いぞ〜これは脈ありか〜」

優人「てめ〜」

拳を作る優人。

俊介「おおっと〜人の彼女に拳をあげるのはいけないよ〜優人君〜
リーリーリー〜」

両手を広げて、体を左右に広げながら俊介が笑いながら言った。

優人「てめーは、盗塁する気満々の一塁ランナーか・・・」

俊介「まあ、野球部だし。これでも。」

優人「なるほど・・・そっつか・・・って、ちげよー!!!」

男子生徒A改めクラスメイトの阿部「お！今日もオアツいね！お二人さん！」

あきらかサクラと優人をみていった。

男子生徒B改めクラスメイト番田「ひゅーひゅー♪」

優人「てめ〜ら〜」

番田「やべー」

阿部「逃げる〜」

優人「待てこの野郎!!!」

阿部と番場を追って優人は走って行った、

俊介「ハハハ。あの二人生きて教室で会えるかな・・・」

純子「難しいんじゃない・・・」

そんな俊介と純子の言葉を聞いてサクラは笑いながら、

サクラ「ふふふ、でも、よかった♪優人君がクラスのみんなとなじむことができる・・・」

純子「そうね。」

俊介「そのきっかけを作ったのは、サクラちゃんでしょ。」

サクラ「まさか・・・私の命を狙うテロリストが教室に来るなんてね・・・」

純子「結果的にそれがクラスみんなの橘君に対する誤解を解くきっかけになったからでしょ。」

サクラ「なんか・・・思ってもみなかったけどね・・・あんな展開。」

俊介「いや・・・でも、優人君の心を開いたのは間違いなく君だよ。」

サクラ「そうかな・・・」

そのとき、ちょうど予鈴が鳴った。

純子「ほら、サクラ！行くよ！」

サクラ「うん！」

こうして、3人は後者に向かって走って行った。

ずっとこのまま・・・

優人「たく・・・あいつら・・・」

俊介「ハハハ。」

阿部と番場に逃げられ、ご機嫌斜めの優人とその隣の席に座っている俊介。

俊介「でも、優人君。クラスのみんなとよく話すようになったよね。」

優人「まあな。」

俊介「やっぱり、サクラちゃんの影響かな。」

優人「そこは否定しねーよ。それに、あいつが異星人で、命を狙われていて、自分たちにも危険なことが起きるかもしれないにもかかわらず、あいつの事を受け入れてくれたこのクラスの連中ならうまくやっていける気がしたただけだ。」

俊介「そっか。でも、優人君いつのまにか呼び方が名前になってない？」

優人「お前だって、サクラちゃんって呼んでるだろ？」

俊介「違うよ。サクラちゃんが優人君って呼んでるよね。」

優人「ああ、そっちな。」

俊介「僕が知ってる中で優人君を下の名前で呼んでるのは、僕とお母さんと元彼女だけだと思ったけど。」

優人「まあ、その通りだよな。言われてみれば。」

俊介「もしかして、このまま本当に付き合って・・・」

優人「殴るぞ・・・」

俊介「冗談です・・・」

優人「たく、お前までそれをいうのか・・・」

俊介「実際どうなの？すくなくても、好意はあるんだよね？」

優人「なんでお前がそんなこと、聞くんだ？」

俊介「親友の恋路の行方を知りたいのは当然じゃないか。」

優人「ニヤニヤしゃがって・・・そりゃあるさ。あいつには感謝してるし、どんな敵からも守ってやりたい。でも、なんかその・・・そういうことはあまり考えたことないな・・・」

俊介「どうして？」

優人「なんていうか・・・ずっとこのままならいいなって感じかな。」

俊介「大切に思ってるんだね・・・」

優人「そう・・・かもな・・・」

しかし、変わらないものなんてない。そう、ずっとこのままでよかったんだ。それだけを望んでいたんだ・・・ずっと・・・このまま・・・

その日の放課後。

優人「さーて、夕飯とザンティスのエプロンの買い出しだ。」

サクラ「あれ、本気だったんだ(笑)・・・」

近場のスーパーで夕飯の材料とザンティスのエプロンを買い、帰路につく2人。

サクラ「本当に買ったんだ(笑)しかも、けっこうかわいい。」

優人「おもしろいだろ？このほうが。」

優人が買ったのは、緑色のかわいらしいカエルの顔が描かれたエプロンだった。

サクラ「ハハハ、ザンティスがつけたらマイホームパパだね。」

優人「ああ、そうだな。」

サクラ「なんか私たち家族みたいだね。」

優人「え・・・」

サクラ「あ、ご、ごめん・・・」

お互い頬を赤らめる2人。

優人「いや、その・・・別にいいんじゃないか？」

サクラ「え？」

優人「俺たちは家族だ。少なくとも、今はな。」

サクラ「優人君・・・」

しばらくの2人は黙っていたが、サクラが口を開いた。

サクラ「優人君、あのね・・・」

優人「なんだ？」

サクラ「今朝、みんなに言われたこと覚えてる？」

優人「今朝って？」

サクラ「その・・・お似合いだとか・・・なんとか・・・」

優人「え・・・いや・・・その・・・ってんなこと気にしてるのかよ！ただの冷やかしだろ。」

優人は苦笑いしながら言った。

サクラ「いや・・・その・・・私はいんだけど・・・その・・・」

優人君は迷惑かかって・・・」

優人「別に・・・迷惑なんてこれっぽっちも思ってたねーよ。」

サクラ「でも、その・・・」

優人「なんだよ？」

サクラ「優人君の好きな女の子や優人君が好きな女の子がいたら・・・私、きっと邪魔になるし・・・」

優人「いや・・・そんな奴いねーよ」

サクラ「そんなことないと思うけど・・・」

優人「そういうおまえは・・・どうなんだよ・・・」

サクラ「私は・・・絶対にこの星では恋はしないよ・・・」

優人「どうして？」

優人はサクラの悲しような、さみしそうな表情をみて、思わず聞いた。

サクラ「だって・・・私はただ好きだからお付き合いするっていうのはだめなんだもん。」

優人は納得した。彼女はサイコティス星のガイア帝国の王女。彼女と付き合うというのはつまり、彼女と結婚して、次の皇帝になることにもなるのだ。

サクラ「だって・・・私たちの星の事なのに、地球の人たちを巻き込みたくない・・・絶対に・・・」

優人「そっか・・・」

サクラ「だから、私もしかしたら結婚しないかも・・・あの大国バルガ王国を敵に回して得する人なんていないもん。」

優人「サクラ・・・」

サクラ「はい。この話はこれでおしまい。かえろ！優人君。」

優人「ああ。」

2人はまた家に向かって歩き出した。

帰宅後、食卓にて、

優人「え？」

サクラ「本当？」

ザンティス「はい・・・」

帰宅し、夕食の準備を優人とザンティスで行い、サクラは風呂掃除をして、3人で食事という一緒に暮らし始めてからのお決まりのパターンを終え、食事にありついているときに、優人とサクラに買ってもらったエプロンをしたザンティスが言った。

ザンティス「今日、本国よりドクターがきまして、こちらの紋章が消えたら私の怪我が治るそうです。」

ザンティスの手の甲には、ガイア帝国の紋章（2本の剣がクロスしていて、その周りに数枚の花びらが描かれている）が描かれていた。

優人「それは？」

ザンティス「これは、魔法のスタンプで押されたもので、この紋章が消えれば病気が治りますよっていう目印みたいなものです。」

優人「便利だな。てか、お前病気だったのか？怪我じゃなくて？」

ザンティス「いや・・・それが怪我は完治したのですが・・・闇の魔法のくらってしまっただけ・・・」

優人「闇の魔法？」

ザンティス「ええ・・・闇魔法の一種で、その術にかかったものは、もう一度魔法を使うと、体内の魔力が逆流して体の内部から爆発してしまう魔術です。」

優人「！」

ザンティス「私生活には支障がありませんが、こんな厄介な魔術いつまでも体に宿たままにするわけにはいけませんからね。」

優人「だよな・・・そりゃ・・・」

ザンティス「この紋章は1週間で消えるでしょう。そうすれば・・・」

優人「俺の護衛も終わりか。」

ザンティス「ええ・・・今までお疲れさまでした。」

サクラ「本当にありがとね。優人君。」

優人「え・・・ああ（改まって言われるとなんだよな・・・）」

サクラ「でも、いいの？このままこの家に住んじゃって。」

優人「気にするな。ひとりで住むにはこの家は広すぎるし、家事も分担できて楽しな。」

サクラ「じゃあ、私たちが卒業するまで一緒だね。」

優人「そうだな。」

ザンティス「すいません。では、お言葉に甘えて今後ともよろしくお願いします。」

優人「よし、じゃあ、今日はザンティスの完治前祝いだ！」

3人はグラスを掲げた。

優人、サクラ、ザンティス「乾杯！」

優人の家の庭にて

優人「こんなところにいたのか。」

風呂上がりの優人がザンティスに話しかけた。

ザンティス「優人殿。」

優人はビールの缶を投げた。

優人「ほらよ。」

ザンティス「これは？」

優人「ビールっていう地球の酒だ。知らないか？」

ザンティス「ほう。これが。」

優人「安もんで悪いがな・・・」

ザンティス「いえいえ。ありがとうございます。しかし・・・実は酒の類は医者に止められておりまして・・・」

優人「なるほど・・・帝国一の酒豪とまで言われているザンティスが、我が家へきて1か月もたつのに、一度も酒を飲んでいないのはこういうことか・・・」

ザンティス「サクラ様・・・」

優人「それに今度はもつといい酒買ってきてやるよ。完治祝いとして。」

ザンティス「それはいいですね。ぜひお願いします。」

優人「おう。一緒に飲み明かすか。」

ザンティス「いや・・・優人殿はまだ未成年では・・・」

優人「細かいことはいいんだよ。」

ザンティス「おいおい・・・」

そういうと優人は笑った。続けてザンティスも笑い出す。

ザンティス「そういえば、優人殿。一つ聞いてもよろしいでしょうか？」

優人「なんだ？」

ザンティス「サクラ様の事をどう思っているのです？」

優人「な・・・別に・・・そんな・・・」

顔を真っ赤にして慌てる優人。

ザンティス「その様子だと、まんざらでもない・・・」

にやりと優人をみるザンティス。

優人「いや・・・その・・・てか、お前も俊介みたいなこというんだな。」

ザンティス「で、どうなのです？」

優人「どうもこうも別に俺はあいつの事は、てか・・・俺みたいな

ただの地球人なんかがその・・・」

ザンティス「ただの？」

優人「疑問点つてそこっすか?!」

ザンティス「いや・・・雑魚とはいえ、魔力を持つサイコティス星の刺客をもう30人は撃退してますからね・・・」

優人「おまえな・・・だいたい・・・お前は俺なんかがその・・・サクラとくつついてもいいのかよ？」

ザンティス「私はいいですよ。サクラ様がそれを望んでいるのなら。」

優人「いや、あいつはそれを望んでいないからな。」

ザンティス「いいえ。サクラ様はあなたの事を・・・」

優人「んな馬鹿な・・・」

ザンティス「私はサクラ様の幸せを願い、それを脅かすものを排除する。それが私の宿命。」

優人「宿命か・・・俺も自分の人生を、宿命の旅路を楽しむことができそうだな。それができそうになったのは」

ザンティス「サクラ様のおかげ・・・ですね。」

優人「それは・・・その・・・」

ザンティス「優人殿がもしサクラ様と一緒になつてくださるなら・・・」

優人「待て待て! 気がえーよ!」

ザンティス「ハハハ。それにもしそうなったら、私はあなたの剣となり盾となりましょう。」

優人「なぜ、そこまでいえる・・・」

ザンティス「それは、私があなたがサクラ様にふさわしい男だと確信をもつて言えるからです。」

優人「俺はそんな・・・あいつにふさわしい男は他にも・・・」

ザンティス「いいえ、いませんよ。今のところは。」

ザンティスは即答した。

サクラ「あれ? 2人とも何してるの?」

優人「な、なんでもない・・・」

サクラ「？」

優人はサクラから顔をそむける。不思議そうに優人をみつめるサクラ。その二人のことを微笑んで見守るザンティスであった。

そして、ちょうど一週間後の今日、ザンティスの怪我は完治した。しかし、その日に優人とザンティスが一緒に酒を飲むことはなかった。

アイアネスの刺客

前回からちょうど1週間後。

優人「おゝい！サクラ起きろ！！！」

サクラ「むにやむにや・・・あと、5分・・・」

優人「いや・・・2回目はもういいから・・・」

サクラ「ほえ？」

優人「いいから起きろ！このボンクラ皇女！！！」

サクラをたたき起して、2人で2階から降りてくる。

ザンティス「おはようございます。サクラ様。」

サクラ「おはようザンティス」

ザンティスはすでに優人が作っておいた朝食をテーブルに並べている。何とも気の利く男だ。

優人「てか・・・前にもこんなことあったような・・・」

ザンティス「いや・・・いつもこんな感じで起こしてますからね・・・

・優人殿は。」

サクラ「ひどいんだよ！ザンティス！優人君、私の事ボンクラ皇女って！」

ザンティス「ボンクラ・・・・・・ぶ・・・」

サクラ「ってそこ笑うところ?!」

優人「皇女殿下も形無しだな（笑）」

サクラ「むゝ」

ザンティス「いつてらっしやゝい」

ザンティスの見送りで、2人は学校に向かった。

優人「なんかこういうのが当たり前になってきたな。」

サクラ「うん、そうだね。」

優人「でも、こんな風景1ヶ月前には想像すらできなかったからな。」

サクラ「今は？」

優人「さあ・・・どうだろうな・・・」

サクラ「そっか。」

優人とサクラはお互いの顔をみて微笑んだ。

そう・・・ずっとこのまま・・・は無理か。卒業するまでずっと・・・このままこいつといたら・・・そんなさやかな願いすら壊されることになるなんて。

番場「おい、橘！サクラちゃん！今から遊びに行こうぜ！」

優人「あ、悪い！今日はちよつとな・・・」

サクラ「あれ？今日なんかあつたっけ？」

優人「おいおい。今日はザンティス完治祝いだろ？」

サクラ「あ、そっか。」

俊介「ああ、ザンティスさんの怪我もう治ったんだ。」

優人「もう今ぐらいには治ってるはずだが。」

阿部「なら、俺らもいつてもいいか？ザンティスさんには世話になったし。」

実は俊介をはじめ、みなザンティスとは面識があつた。

純子「前、橘君と一緒にみんなを守ってくれたもんね。」

優人「ああ、そういえばそうか。」

俊介「じゃあ、みんなで行こうか！」

サクラ「ザンティス喜ぶよ。きつと。」

優人「そうだな。」

その時、校庭で大きな爆発が起きた。校庭で部活動をしていた生徒が一斉に逃げだし、教員の指示のもと避難を開始している。

番場「なんだ？！」

純子「まさか・・・刺客？」

俊介「でも、いつもとなにか・・・」

優人「俊介、阿部、番場！みんなを頼む。」

阿部「おい！橘！！！」

サクラ「優人君・・・」

優人は校庭に向かって走っていた。

優人「何者だ！！！」

優人の前に現れたのは数名の兵たちと身長2メートルもあるうかという大男だった。

パオ「私の名はパオ。アイアネス王国の将のひとりだ。」

サクラ「アイアネス王国！」

純子「サクラ、どうしたの？」

サクラ「アイアネス王国は、ガイア帝国に次ぐサイコティス星の第3の勢力と言われている大国です。わが国には隣接してるだけあつて、とっても仲が悪いんだけど。」

優人「そのアイアネス王国の將軍様が何の御用で。」

パオ「言うまでもないだろう。あなたが守っているガイア帝国の皇女殿下をいただきますに。」

優人「一度聞こうと思ってはいたのだが、なぜお前らはサクラばかり狙う。」

パオ「今までお前らを襲ってきた三下どもは知らんが、私の主はサクラ皇女殿下の事をたいそうお気に召されておつてな。」

優人「なるほど。よくわかった。」

パオ「ほう。なにがわかったんだ？」

優人「てめーらがとんだ下衆野郎だつてな！！！」

そっつい、優人はパオ一味に斬りかかった。

パオ「貴様のような下等な地球人に私が手をくだすことはない。やれ。」

パオの手下数人が優人を迎え撃つ。しかし、優人はひとり、ふたりとあしらう。

パオ「ほう、少しはやるようすな。」

優人「何？」

いつもと何かが違う。優人の戦いをみても動じることなく、余裕

に満ちた笑みを浮かべている。今までの奴とは違つと優人は本能的に感じたらしい。

パオ「そもそも、鉄で作りだした武器など愚の骨頂。本当の武器は・・・」

その瞬間、パオの体を水色のオーラをまとい、そのオーラの一部が変化し、大きな斧と化した。

パオ「己の魔力で作り出すものだ。」

優人「なに・・・」

パオ「魔力すら持たぬ愚かな地球人よ、死して自分の無力さを知るのがよい。」

優人「あまり俺をなめるなよ・・・くらえ!!!」

優人はパオの懐に入った。

パオ「ふん」

パオは大斧を優人に向けて振り下ろす。その瞬間、まるで震度3はあろうかという地響きが校庭中に響いたが、パオの斧の先に優人はいない。

パオ「なに?!」

優人「ここだ!!!」

優人はパオの背後に回っていた。

パオ「こしやくな!」

すかさず、自分の背後に斧を振りかざすが、その斧をかわし、背中に斬りつける。

パオ「のわああ・・・」

背中を思いつきり斬りつけられ、痛みあまり膝をついたが、もう一度斧を振りかざし、優人に斬りつける。優人はそれを双剣でうけとめるが衝撃で数メートル後ろに押された。

パオ「貴様・・・」

優人「お前はもう、サイコティスの地に立つことはない・・・もうすぐ、完治したザンティスも来る。お前らはこれで終わりだ。」
パオ「だからですよ。」

優人「え？」

パオ「帝国にその人ありといわれた風の貴公子ザンティスが来れば、サクラ皇女殿下を手に入れるのがより困難になるからな……」

優人「なんだと……」

パオ「下等な地球人の分際でこの私に傷をつけたこと……ただではすまんぞ……」

優人「なんだ……こいつ……」

さつきとは、うつて変つて別人だった。

サクラ「まずい……来る……」

純子「来るって……何が来るの？」

サクラ「優人君が体験したことないような大きな魔法が……」

パオは斧を右手で回転させ、斧の先端を優人に向けた。そしてパオ「しね！！！！！！下等な地球人！！！！＜アクアレイド＞」

その瞬間、斧から強烈な水の大砲玉のようなものが放たれ、優人に襲いかかる。その速さは、まさに秒速。優人はそれをもろにくらい数十メートル先の校舎に体を叩きつけられる。

優人「ぐわああああああああああ！！！！」

優人の叫び声が学校中に響き渡った。

サクラ「優人くん！！！！！！」

ありがとう

サクラ「優人君！優人君！！」

純子「サクちゃん！落ち着いて！！！」

サクラ「でも・・・優人君が・・・優人君が・・・」

純子「だめだよ。あなたが出てったら、何もかも終わっちゃう。俊介もサクちゃんをとめ・・・俊介？」

俊介「行くよ！2人とも！」

阿部、番場「おう！」

純子「ちよつと！3人とも何してるのよ！！」

阿部「何って・・・」

番場「そりゃあ・・・」

俊介「友達を助けにね！」

そういつて、3人は校庭に走って行った。

そして、

俊介、阿部、番場「くらえ！！！」

体育で使った竹刀を3人とも持ってパオに襲いかかる。しかし、

パオ「くウエーブ」

水の波が3人を襲う。3人とも数メートル吹っ飛ばされる。

俊介「くそ・・・」

パオ「下等な地球人の分際で生意気な。」

俊介「下等な地球人だって・・・」

パオ「そうだ。我が主がサイコティス星を滅ぼしたあかつきには、地球を支配し、下等な地球人どもすべてを奴隷としてやるわ。ハハハ」

俊介「くそ・・・外道め・・・」

パオ「何度でも言うがいい。貴様らなど湧いて出る虫も同然。この場にいるものすべてを殺してやるわ。」

俊介「くそ・・・」

パオ「死ね!!!」

パオが斧を振りかぶったそのとき、

パオ「な・・・」

パオの右の肘に短剣が突き刺さった。斧を思わず背後におとすパオ。

優人「手を・・・出すな・・・」

サクラ「優人君!」

そこには、全身血まみれで満身創痍の優人がいた。

俊介「優人君・・・」

そっぴい、俊介は気絶してしまった。

パオ「この・・・またしても俺に傷を・・・」

そのとき、優人は前のめりになって倒れた。

パオ「ハハハ。やはり我がアクアレイドをくらって、まともに立っていらるはずはないか。」

優人「くそ・・・」

サクラ「優人君!」

パオの手下によって両手をふさがれた状態でパオの前に立たされる。ひとりに左手、ひとりに右手をおさえられ立たされている。

パオ「さて、優人とやら。よくも、この俺に傷をつけてくれたな。このまま殺すのはたやすいが、それではおもしろくないな。」

優人「・・・」

パオは手始めに優人が投げて自分に突き刺さった短剣を抜いて、優人の両足の太腿を切り裂く。

優人「く・・・」

苦痛の顔をうかべ、膝をつく。

パオ「おい。膝をつくのはまだ早いぞ。」

手下によって、無理やり立たされる優人。優人は膝上を切り裂かれていたため足に力が入らない。

パオ「おいおい。その程度でくだばってもらっては・・・困るんだよ!!!!」

そう言いながら今度は優人の体を十文字に切り裂く。

優人「な．．．．．」

痛みあまりまたも倒れそうになったが、パオの手下によって無理やり立たされる。優人のカッターシャツは切り裂かれ、それがみるみる血に染まっっていく。

サクラ「やめてええええええ」

パオ「サクラ皇女殿下。あなたが我々にくだるというのなら、ここにいるものすべて助けてやってもいいのだが．．．」

サクラ「！！！！」

優人「よせ．．．サクラ．．．ぐは．．．」

その瞬間、パオは優人の左の脇腹を短剣で突き刺し、それを時計回りに回す。

優人「．．．．．な．．．」

激痛にまた膝をつきそうになるがそうはさせてはくれない。みるみるうちに優人のシャツは赤く染まる。

パオ「さあ、どうします？サクラ皇女殿下。このまま彼を見殺しにしますか？調べたところあんたは彼と親しいそうですが．．．正直、こちらがまんしているのですよ、このクソガキをブチ殺したくて仕方ないのを必死に我慢しているのですよ。」

サクラ「．．．．．」

優人「サクラ．．．俺の事はいいから．．．早くにげ．．．ぐは．．．」

言葉が続けようとした優人に対し、パオは短剣が刺さってる腹を思いっきり蹴とばす。優人は地面にはいつくばり、パオに頭を踏みつけられた。

パオ「まだ、自分の立場がわかってないようですね。虫けらはおとなしく標本にでもなりやがれ！さあ、どうします？サクラ皇女殿下。」

その言葉を聞いて、サクラは何も言わず、まっすぐ校舎から出て校庭まで降りてきた。

優人「サクラ・・・」

サクラ「ありがとう。優人君。」

サクラはそういつてにつこりと笑った。

パオ「連れて行け。」

部下数人に連れられ、サクラはパオが用意した宇宙船に乗り込もうとする。そのとき、

サクラ「さようなら。優人君。」

笑顔で優人に言った。

優人「サクラ・・・サクラ！！！！」

サクラを乗せた宇宙船は、現れた空間の切れ目の中に入っていた。おそらく、ワープ装置みたいなものだろう。そして、その空間の切れ目はゆっくりときれていった。

パオ「ハハハ・・・よし、皆のものここにいる地球人すべて殺せ。」

優人「な・・・てめえ・・・」

パオ「ハハハ。この俺様が下等な地球人どもを生かすと思ったのか・・・」

純子「そんな・・・約束が違うじゃない！！！」

パオ「ハハハ。さて・・・なんのことかな。」

パオとその手下は冷酷な笑みをうかべ、地面にはいつくばっている優人に斧を振りかぶった。

優人「・・・（くそ・・・ここまでなのか・・・）」

パオ「死ね！！！！！」

優人は自分の死を覚悟した。しかし、

パオ「な・・・貴様は・・・」

優人「・・・あ・・・あああ」

そこにいたのは、優人の目の前でパオの斧を刀で受け止めていたザンティスだった。

優人「ザン・・・ティス・・・」

ザンティスはその斧を払いのける。パオは後ろに距離をとる。そ

して、剣を鞘に納める。そのザンティスの目は今まで優人の見たことのない目だった。いつも、ニコニコしていたザンティスしか見たことのない優人にとって、ザンティスが見せる気迫、殺気はすさまじいものであった。

パオ「みななもの、かかれ!!!」

部下数十人が一斉にとびかかる。

ザンティス「斬空烈破」

その瞬間、ザンティスは刀を抜き、空気を切り裂く。その瞬間に空気の刃が発生し、襲い掛かるパオの部下数十人の体が全員真っ二つに引き裂かれ、それらがぼとぼと地面落ちる。そして、刃をパオに向けいった。

ザンティス「死ぬ準備はできているか。」

パオ「貴様・・・傷はもう・・・」

ザンティス「覚悟しろ。貴様はやってはならないことをした。」

パオ「貴様ら、ガイア帝国は何故地球人をかばう。魔法を使えぬ下等な種族を」

ザンティス「そんなことは知らん。帝国の掟の一つだ。地球人は同じ宇宙を生きる友だ。故に手を出す物を許さない。だが、この際その掟は関係ない。」

パオ「なにに」

ザンティス「お前は奪った、大切なものを。そして、傷つけすぎた。俺の大切な人たちを・・・」

パオ「ふん」

パオはその瞬間、パオは魔法で水の衝撃波を地面にたたきつけた。ザンティス「なに・・・きいさまああああ」

パオ「また、会おう。ザンティス。そして、地球人ども。今回は見逃してやろう。だが、覚えておくがいい。私の主がサイコティスを統一したあかつきには、貴様らを俺の前で膝まつかせてやろう。その日を恐怖に怯えながら待っているがいい。」

そう言い残して去っていった。しかし、ザンティスは追いかけて

うとはせず、優人のもとにかけつけた。」

ザンティス「優人殿。優人殿。大丈夫ですか。」

優人「俺の事より・・・みんなを・・・」

ザンティス「大丈夫です。あなたほど大丈夫じゃない人はいません。」

優人「おい・・・ひでーいいいようだな。」

ザンティス「あなたは・・・そこまでして・・・みなさんを・・・サクラ様を・・・」

優人「サ・・・ク・・・ラ・・・」

優人はそれから3日間眠り続けることになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4340n/>

宿命の旅路

2011年3月19日02時51分発行